

# カフカ覚書

平野篤司

## 序

書き上げた、または多くは書き付けたといったほうがよいような作品を、かなりの部分は原稿のかたちで、しかもそれらを例外なく焼却処分するように親友に託した著者から残されたものをどう受け取ればよいか、これについてはクンデラがその『裏切られた遺言』<sup>1</sup>において原作者に味方する立場を維持しながらも、そこには作者と作物の間の微妙な問題があることを縷々論じているが、当方としても敢えてカフカの遺志を裏切って別の展開を図ってみたいと思う。その際、できるだけカフカの言葉の歩みに沿いながら、そこにかがわれる驚異を探り当ててみたい。

さしあたり手がかりとして取り上げるのは、小品『掟の前で』<sup>2</sup>である。これは、『審判』<sup>3</sup>の最終部に挿入された寓話でもあり、この長編作品との関連は不可分なほど密接である。『掟の前で』を解釈するとすれば、もう一つ外側にある巨大な物語を無視するわけにはいかないのは明らかである。だが、これは作者自身が1919年に『田舎医者』<sup>4</sup>という短編小説集に収めた独立した作品でもある。本論はこのいわばマイクロコスモスから途方もないマクロコスモスを遠望しようという試みである。

## 1. 寓話『掟の前で』

これは、メルヘンともいうべき小品である。上述のような事情もあり、あたかも外の審判の世界を解き明かす寓話のような性格を備えている。しかし、ノヴァーリスの『ザイスの弟子たち』における『ヒヤシンスとバラのメルヘン』のような浄福感もなく、彼岸の幻想的風景もないし、ゲーテの『親和力』における挿話的メルヘンのような救済のイメージも

存在しない。このメルヘンは、ひたすら審判という物語の深淵への傾斜を加速し強化するばかりであり、彼岸的、浄土的、救済的動機は一切見当たらないといってもいい。ヨゼフ・Kは、ここまで追い詰められれば、あとは死を迎えるばかりということは疑う余地がないほどだ。事実、これはKの死刑宣告の後で聴罪神父の語る寓話であり、彼の死刑執行はすぐそのあとである。そこで主人公は、自らが臨む事態を「犬死だ」と叫んでいる<sup>5</sup>。このような意味で、この寓話は、審判の物語を解き明かしているわけもなく、説明するわけでもない、無慈悲にも物語の深淵へと主人公を突き落とすのである。このような志向性の強度を持った寓話はほかに比肩するものがない。

ここでカフカにおける比喩あるいは寓話のありようを見ておく必要があるだろう。カフカ自身に『比喩について』という小文がある<sup>6</sup>。

「賢者たちの言葉というのは、いつもきまって比喩に過ぎない。日々の生活には応用が利かない、といって嘆く人が多い。……このような比喩は、どれももともと、わからないことはわからないということをおうとしているだけだ。そのことなら私たちもわかっている。私たちが日々苦勞していることはそれとは別のことだ、と。

これに対してある者が言う。『なぜ抗うのか。比喩に従っていけば、君たちそのものが比喩になってしまい、それで日々の労苦から解放たれるのに。』すると別の一人は次のように言い返す。『賭けてもいいが、それも一つの比喩だ。』初めの男は言う。『君の勝ちだよ。』それに対して相手は次のように応じる。『でも、残念ながらそれは比喩においてに過ぎない。』その相手はそれに対しさらにこう言い返す。『いや、勝ったのは現実においてなのだ。比喩において君は負けたのさ。』  
(Er 48)<sup>7</sup>

比喩というのは、単に日常の生活を離れたところにあるのではなく、かえってそれを凝縮し結晶化したものに他ならない。そのような比喩と

いうのは、それを反映する強度をもった言葉のことである。これに対して、外部からすべては比喩だというようなことを言っても、それは形式的に整合的な真実にすぎない。比喩を通して、生きていることの実質をつかまない限り、人は外部者に留まるのだ。ここでは、比喩の世界のほうが言葉を持たないいわゆる現実を圧倒している。比喩は、決して現実のあいまいな抽象化ではなく、それこそが生の実質を保証するのである。だから、比喩の内部に入り込まなければ、負けなのである。

カフカにおける寓話というのは、このような比喩の物語である。だから寓話は、生の現実という物語の志向性を強化し、凝縮せざるを得ないのである。『審判』という世界もちろん文学の言語によって成り立っているのだから、一種の抽象化の結果として存在している。それは、実質的に寓話といってもよいだろう。『掟の前で』は、その寓話の中に嵌め込まれた寓話なのである。このように、カフカの物語は、迷宮じみた少なくとも二つの世界から構成されている。

カフカの比喩の結晶化の成果をその頂点ともいうべき『掟の前で』において確認しておきたいと思う。その際、カフカが言うようにその比喩に従って、作品の言語に即していきたいと思うのである。さもなければ、寓話の前に佇むばかりで、迷宮の中に入ることすらかなわぬことだろう。

## 2. 与件を受容すること、そしてそれを生き抜くこと

読み手は、掟 (Gesetz) という言葉にいきなり遭遇してしまう。これには法という抽象的な概念よりも、宮殿のような構築物を想定したほうが良いだろう。これが語りの開始とともに措定され (gesetzt)、我々はその存在を受け入れなくてはならないのだ。これはカフカにおいては、前提条件である。たとえば、『変身』の冒頭でも、途方もない虫の存在を受け入れなくてはならないのである。このような物語の開始部は、メルヘンの得意とするところでもあろう。このような状況の措定は、だしぬけに、偶然になされる。まさに埒の開かぬまま佇む田舎出の男は、自分が遭遇した偶然を呪うのだが、人は状況というものを選択することはで

きないのだ。ギリシア悲劇におけるオイディプスのように、一種神話的世界に投げ込まれた一個人の運命のことでもある。ドイツ語で、偶然のことを Zufall というが、これは落ち来たるものということで、そこには主体としての個人の出る幕はない。せいぜいそれを呪うことができるだけという受動的位置に留まる。しかし、いくら呪うべき事態であっても、それを拒絶することはあり得ない。人がなすべきことは、それを受け入れて生き抜くことである。

しかし、ここに反転の契機が潜んでいる。それは、否応なしに人がその偶然を引き受けることによって、この事態を個人が深くかかわることのない偶然的事象から、個人にとって抜き差しならない必然的な出来事へと転じる可能性があるということだ。田舎出の男は、この門の前に来てから死ぬまでをそこで過ごすということになるが、それが彼の人生である。ということは、彼が自分の全人生の課題として、運命としてこの事態を引き受け、生き抜いたということである。彼は、蛮勇をふるって事態の強行突破をはかるということも、そもそもその企てをあきらめて引き返すこともしないのは、もちろん門番の恐ろしげな気配に怖気を覚えてということはあるが、そのことも含めて彼はこの世界に謙虚なへりくだりの姿勢をとっているからだといえよう。彼は、掟の力に屈したともいえるが、その死に至るまで入場の許しが出るまで待つという受動の行為に人生をかけることになるのだ。ここで次のカフカの断章を読み合わせることは意義深いことだと思われる。

「謙虚さは、絶望した孤独な人をも含めてだれに対しても同朋としての最も強力な関係をもたらし。それも、即座に。しかし、それは完全な、また持続的な謙虚さでなければならぬ。それが可能なのは、謙虚さは真実の祈りの言語であり同時に崇敬の念であり、最も確実な結びつきであるからだ。同朋に対する関係は、祈りの関係であり、自分自身に対する関係は、努力の関係であり、その祈りから努力の力がもたらされるのである。」(Er 208) <sup>8</sup>

それでは、なぜこのような謙虚さがもたらす無間地獄で苦闘しなければならないのか。それは、彼がこの事態を唯一無二の与件としてとらえているからにほかならない。時とともに彼のうちにあって呪わしい偶然は、依然として呪わしいままであろうが、唯一無二の場すなわち必然へと転化している様子を窺うことができる。彼が次第に困難な現実に関しんでいく様を見逃してはならない。自らの宿命を自覚し、受け入れ、その課題を果たしていこうというのである。そしてその志向性は祈りに似て、死ぬほどの努力を引き出さずにはおかない。ここでは、世界を無視することも、自分を無視することもできはしないのだ。自分の人生を生きるということは、この世界と格闘することであり、それに親しむことでもあるのだ。たとえば、こんな場面もある。旋の門の前で、ということはある時点からは門番の前でと言い換えてもよいが、待ち続けるうちに門番の着ている毛皮のコートの襟に住み着いた蚤とも知り合いになり、どうか門番の気持ちを和らげるべく取り計らってくれと頼み込むというのだ。彼は自分の世界の打開のためありとあらゆる策を講じる。正攻法が効かなければ、門番に賄賂をつかませることをも辞さない。それもすべてをなげうってでもやり抜くのである。むろんその場合でも強行突破は固く封じられている。

カフカは、あるアフォーリズムにおいて「彼にはすべてのことが許されているが、自己忘却だけはだめだ」(Er 220)と書いているが、人は世界とともに生きることによって自分と世界の融和を求めなければならない。

ここで確と抑えておくべきことは、個人では見通しのつかない状況と個人の世界との相違である。明らかに相異なる二つの世界が同心円的な構造のもとに密接に、しかも厳しく離れて存在する。それゆえ個人の認識と思慮、またそれに基づく行為は、大世界において空転する。このような状況のなかで全力を尽くし、苦闘するのが田舎出の男である。彼は、必死になって外の世界から入場の許しを得ようとするが、二つの世界は、

なかなか出会うことがない。衝突もなく、すれ違いばかりである。だが、もしそのままの状態が続けば、外の世界は彼には縁なき存在としてとどまる。それでは彼は自らの課題を果たすことはおろか、自分の宿命を放擲することとなり、自分の人生を生きぬくこともできないのである。

しかし、二つの世界の接点は可能性として存在する。それは田舎出の男それ自身であり、門である。だからこの小説の題は、『掟の前で』なのである。彼の苦闘の軌跡は、まるで座標軸に対する漸近線のごとき歩みである。これらの線が交差したり、重なり合ったりすることは原理的にないのであろう。それは何よりも男の人生が証明している。それでは、掟の中へ入るためにこの男ができることは何であろうか。ひたすら許しが出るまで待つということだけなのか。確かにそれを待たなければならぬが、時とともに彼と世界の関係には、親和性さえ生じてくるのであって、謙虚な祈りに似た彼の志向性は、具体的、実践的な努力を生み出している。もちろんこれが実を結ぶというわけではなくその努力はすれ違いあるいは空回りに終始しているが、この親和性の獲得こそ世界に近づく唯一の手段である。それは現実の行為として実践されている。

カフカは、別のところで、「目標はある。だが道はない。我々が道と呼ぶのは、ためらいだ。」(Er 197)<sup>9</sup>と書いているが、まさにこの試行錯誤のためらいこそこの男の人生行路ではないだろうか。彼にも門の中に入るという明確な目標はある。だが、皮肉にも目の前の入口までの道がないのである。その結果彼はほとんど行為とは呼べそうにない逡巡とためらいを積み重ねていく。この道行を無益と言ってすまされるかどうかということが、この作品の読みのかなめとなるであろう。

カフカにはこうした趣向の作品が数多くある。『巢穴』という世界にはおびただしい数の緻密に構成された通行路があり、道同士の結節点がある。しかし、これらが生存のために作られたものであることに疑いはないものの、穴掘りが本当に有益なものかという根本的問題は絶えず生じており、まるで巢穴を作るにあたって膨大な考えをめぐらすことそれ自体が、苦しみでもあればまた同時に喜びでもあるといった複雑な、

そして充実した道行が展開されているのだ。この作品の原動力はこれらの思念の展開であり、それが主人公「私」の生そのものともいえるだろう。この作業で築かれる膨大なネットワークは、そのような逡巡とためらいの廢墟にも似た豊かな形成物ではなかろうか。

『掟の前で』も、やはり主人公の無益な努力の結晶であって、そのためらいの造形物とみることができよう。

### 3. 永遠の現在

ためらいは常に現在時に起こる。当然人の過去はあろう。また未来がありうるからこそ不安や怖れも、希望もあるのだ。現在という時の結節点は、無限の広がりを持つ。だがその都度いくつもの可能性のうちの一つを選択しなければならない。また、それが正しいものである保証はどこにもない。そして、正しい解があるとしても、そこに通じる道を探るための切り口は、自らつけていかなければならない。たぶん『巢穴』のように通路は目に見えない地下で縦横に結び合っているのだ。それらを一挙に見渡す視点は地上の存在者にはもちえない。だから、人は存在している現在の居場所で自らの行動について考えざるを得ないのである。その際にためらいが生じるのは当然だ。

「逃げ場は数限りなく、救いは一つ。救いの可能性はこれまた逃げ場と同じくらい多い。」(Er 197) <sup>10</sup>

この世界には絶対的な基準点というようなものは見いだせないのか、あるいは存在しないので、人は絶えず自分の立ち位置を確認することが求められる。それも頼りがいのない自分を頼りとしながら。道に迷うなどというもおこがましいほど迷い、ためらいは常態だ。そもそも道は、迷いの場といってもよいのではないか。

「道に迷う。真実の道は鋼索の上を通る、しかしそれは高所に張ら

れてはいない、地面のわずかに上のところだ。それは、その上を通っ  
てもらったためというより、躓かせるためにあるかのようだ。」(Er 195) <sup>11</sup>

カフカの世界には歩くのに快適で一様になめらかで平坦な道というもの  
は見当たらない。速く移動すること、ましてや駆けつけることは、禁  
じられているかのようである。『皇帝の綸旨』では、使者が急げば急ぐ  
ほど障害物が多くたちあられ進行を阻害されている。彼は走ってはい  
ても、あるいはそれだからこそ、まるで悪夢のなかにいるように道とい  
う迷路に立ち尽くすかのようなようである。一步先に行けば行くほどその歩み  
は遅くなるといった様子である。しかし、この滞りこそが使者の使命を  
果たすための誠実な証となっているのだ。あたかもエッシャーの精密な  
迷宮の図柄を見る思いがする。彼が歩いているのは通常の意味での道で  
はない。道があるとしてもそれを越えていくためのものではなく、より  
深く引き留められる場所でさえある。これこそが、人が生きる場所とい  
ってもよい。カフカの言うように、目標はあっても道はないのである。

「おまえが平坦な場所を越えていくとする。しかも歩くという確か  
な意志をもって。だが後退を余儀なくされてしまう。それは、絶望的  
なことであろう。一方険しい懸崖をよじ登ろうとする。それがおまえ  
自身はるか下から見あげるほど険しい崖だとして、その際岩場のもろ  
さなどによる後退も大いにあるわけだ。それは、何も絶望するには及  
ばない。(Er 196-197) <sup>12</sup>

人生は絶望に満ちた険しい道行だといわなければならない。前進する  
とみえれば後退がなくては済まない。ここでは焦り、性急さは禁物であ  
る。課題が人生そのもの、生きるということにあるのだから。

「人の誤りのすべては、焦りにある。それは、確かな方法的なものを早々  
に中断すること、もっともらしいものをもっともらしくまとめあげる



ことである。」(Er 195) <sup>13</sup>

絶えず道なき道を歩むこと、絶えず途上にあることは、同時に絶えず現在時にあることに通じる。過去は与件として受け入れなければならないが、かといって確定されたものでもない。未来は開かれてあるとはいってもその可能性はまさにそれゆえにとりとめもない。その過去と未来の結節点こそ現在であり、この時点を離れてはその人の人生を歩むわけにはいかない。

「未来にのみ心を配る者は、現下の瞬間に心を煩わせる者よりも用心深いとは言えない。というのも彼は、最も大事なこの瞬間をないがしろにして、その継続だけに心がけているのだから。」<sup>14</sup>

『掟の前で』は、この現在時という契機を厳密に展開した世界である。それは、主人公の男と門番のやり取りにおいて、入場許可は得られるかという問いに対して門番は決まって「可能だが、今はだめだ」と明確に答えているところに表われている。この答えの中の「今」という言葉が男にとっては、かろうじて望みをつなぐよりどころとなっている。その期待感は、当初は強く、次第にはかないものとなっていくのだが、原理的には、この今が続く限り、その許可は下りない。この事態は、男の死まで引き伸ばされることになる。

門番が男に対して希望を持たせることは、親切な思いやりと言えなくもないが、残酷な仕打ちであるともいえよう。男が差し出す賄賂も門番は確かに受け取ってくれる。ただしその際に、「私が受け取るというのは、おまえが後で何かし残したという後悔を覚えないようにと思っただことだ。」と釘を刺している。また、膠着状態が長引きそうになると、男に椅子を提供し、坐るように勧めている。これも親切心の表われか、意地悪か、しかとは区別できない。おそらくは、門番の行為は、同情だとか思いやりだとかという心情から発したものではなく、論理的な可能性を

探り、この世界の奥行きを知らせるための措置なのだ。門番は冷酷ではない。冷静なのだ。

そこで確実に展開されていく時間は、徹頭徹尾現在である。この現在というのは目の前の現在時ということでもあれば、また人の死まで続く現在でもある。人の一生ははかないといえ、まことにはかないが、その当事者にとって継続する現在は永遠なのである。これは、この物語においてきわめて明瞭に見て取れる。それは、語りの時制である。物語を構成する文の時制の大半が現在形であるという目覚ましい事実である。男が旅の用意として様々なものを持ち来ったことは過去のことなので現在完了が使われている。また、臨終間近の最終局面で、掟の奥より射し込む光を男が確かに認めたと、ある箇所、現在完了の時制が用いられている。これは極めて迫真的な出来事であり、これを表すのに、ある意味で現在形より現在的である現在完了形が使われていることはまことに印象深い。それ以外には、まさに末尾において、門番が「この入り口はお前だけのために定められたものだった」と宣告するところで過去形が使われている。この過去形もやはり、現在時とは切断された過去という過去形の基本的ありようを如実に示しており、衝撃的である。もちろん門番の語る「私は門を閉める」は、現在形である。しかしこれは、門番にとっての現在であり、男の現在はもはや存在しない。やはり、現在時制で語られてきた時空がこの男にとっての人生であったのだ。これほど物語の現在時制が文字通りそのまま生きられた証となっている例もなからう。永遠の現在は、男に永遠の否を投げ続けるのである。

#### 4. 受動と受難あるいは生と死

さて、この物語の主人公は、掟の世界から疎外され、ついには『審判』のヨゼフ・K同様に犬死したのであろうか。確かにここには救済や宥和の可能性は窺うことができない。だが、それにしても掟の門がこの男ただ一人のためのものであったとは、何という顛末だろう。ここに彼の認識上の最大の間違いがあったというべきであらう。じつは、疎外された

人は、選ばれた人であったのだ。まるでここにユダヤ人のありようを見る思いがする。被差別民と選民の相反する両面を同時に体現してしまう存在ともいえるからである。少なくとも彼は、最後に至って、そのことを門番に認めさせたといえるのではないか。掟も門番も彼のために存在していたのであり、彼の死とともにそれらの存在が意義を失うのは当然のことなのである。そもそも世界の存在が彼に依拠していたのである。彼は、押しも押されもしない堂々たる主人公であったのだ。

なぜそのようなことが可能だったのかといえば、彼が焦りと性急さを抑えて、ひたすらに入場許可を待ち続けるという究極的な受動の姿勢を貫いたからに他ならない。それは、受動であるがゆえに対象である掟の世界をまるで鋳型のように写し取るというべきか、さらにはそれを体現してしまうのである。これは、対象を理解するという究極の行為ではないだろうか。彼の意識はさておき、掟の世界をこれほど理解した者は他にはいないはずである。対象への理解は、他動詞的にそれを把握する、あるいは捉え、自分のものにするということからは決して生まれることではない。むしろ、自動詞的にそれに即して存在すること、生き抜くことによってはじめて可能となる。カフカの言葉に次のようなものがある。

「所有はなく、ひたすら存在があるばかりだ。最後の息を、息が尽きることを望む存在があるばかりだ。」(Er 198) <sup>15</sup>

「自己を放擲することではなく、自己を消尽することだ。」<sup>16</sup>

そして、相方の世界との関係性では、自分の存在を消尽し尽すためにも、そちらに味方することが求められている。自分に集中することだけでは自分も世界も広がりはないのだ。この主題にかかわるカフカの言葉を並べてみよう。

「お前と世界の戦いにおいては、世界の側に味方することだ。」(Er 200) <sup>17</sup>

「自己認識には悪があるだけだ。」<sup>18</sup>

「生の始まりにおける二つの課題。自分の圏域をどんどん狭めること、そしておまえ自身がどこかその外部に潜んでいるのではないかと絶えず検証することだ。」(Er 206)<sup>19</sup>

「二つの可能性。自分を限りなく小さくすること、あるいは小さくあること。後者は完成であり、すなわち無為であるが、前者は開始であり、すなわち行為である。」(Er 205)<sup>20</sup>

生きるということは、世界とともに生きるということである。そして、その力はそこから生まれてくるのだ。次の言明などなかなか力強いといってもよいだろう。

「真の対立者から、限りない勇気がお前の中に流れ入る。」(Er 197)<sup>21</sup>

しかし、その根底には限りない受動の姿勢が貫かれていることを忘れてはならない。そして、自己否定、さらには原理的な否定という動機がまぎれもなく確認できる。

「否定性を貫くこと。これが相変わらず我々の課題だ。肯定性ならわれらに既に与えられているのだから。」(Er 197)

マックス・ブロートの手により『出発』と題された寓話のような小品がある。そのテキストは、かなり切り詰められた短縮版であるが、原典版に従って全文を引いてみよう。

「厩から馬を出すように命じた。従者は私の言うことがわからなかった。そこで自ら厩に赴き、馬に鞍をつけ、そして跨った。遠くでラッパが吹き鳴らされるのが聞こえた。従者に、あれは何だろうと尋ねた。彼は知らないと言ったし、実際何も聴いていなかったのだ。かれは門

のところで私を引き留めて、尋ねるのだった。『ご主人様、どちらへお出かけで。』私はこう答えた。『わからない。ただここを出ること、ただここを出ること、ずっとここを出ていくこと、これだけが行く先にたどり着く道だ。』『それでは行く先がおありで。』『そうだ。さっき言っただろう。ここから出ていくことが私の目標だ。』『糧秣を持たずに。』と尋ねるので、『その必要はない。この旅は、途中で食べ物を調達できなければ餓死してしまうこと必定なほどの長旅なのだ。糧秣などの備えは私の役には立たない。幸いにも真実途方もない旅路なのだから。』(T 136、Franz Kafka: Nachgelassene Schriften und Fragmente II 374-375)<sup>22</sup>

ここ(家屋敷)に留まれば、忠実な従者にも守られた安逸を貪ることもできたはずだ。しかし、彼には、それよりも重要な課題があった。それは、何も持たず身一つで道そのものを頼りにして生きていくということだ。どこにたどり着くのかはわからない。確かなのは、自分の存在の場であるここを立ち去ることだという。それも持続的に絶えず今いるここを去ることなのである。これは自己否定であり、自分を更新していく行為に他ならない。カフカの世界には、このように自己の現存在の乗り越えという課題がその表現の中核を貫いている。このような決断は、従者の知るところではない。かれには、そのような促しの信号を感受することがないのだから。それを受け止めるのは、他人ではありえない。

「彼が宿題そのものだ。(他に誰もそれを解いてくれる)生徒はいない。」  
(Er 197)<sup>23</sup>

自分の、あるいは自分という課題はまさに自分一人で解決するべく担っていかなくてはならないのだ。『掟の前で』の入口も他ならぬあの男だけに定められたものだった。かれがその課題のありようを認識したのが臨終の間際であったというのは、この世界の実に意地悪なほど皮肉

な構造を示していて、残酷である。解決もなければ、救いもないといえるだろう。だが、これはまさにこの世に生きる者の人生の実相なのではなかろうか。いかに誠実に世界に対して対処したつもりでいても、一個人の認識の不十分さはいかんともし難い。カフカ自身が言うように、認識は悪なのかもしれないが、人はきわめて限定された条件に生きざるを得ないのであり、その認識を拡大深化させる以外に道はないのだ。クライストがそのエッセイ『マリオネット演劇論』<sup>24</sup>において、優雅さを失った人間が無限の認識を経ることによって再びそれを獲得することを説いているが、それはほとんど神業であり、生身の人間に実践並びに実現可能なことではない。漸近線が座標軸に到達することはないからだ。

人の生き方として問われるのは、目標に達することでも、課題を解決することでもなく、いかにそれに向かって迫っていくか、どのような道行を敢行するかということであろう。その意味で、残酷とも思われる田舎出の男の人生行路は、犬死だと一義的に片づけることはできない。かれが様々な迷いのうちに、結局はこの世界のありように身をゆだね、臨終のときに驚くべき認識を得たということは、優雅さを回復したとはとても言えないかもしれないが、人としての生き方を全うしたとみることもできるだろう。

『掟の前で』は寓話であり、比喩の世界である。そのなかで主人公は文字通り比喩に身を添わせることによって比喩そのものに成り得たのであろう。比喩を生きるということは、それほどに過酷なことなのだ。

- 1 ミラン・クンデラ『裏切られた遺言』（西永良成訳）1997年 集英社刊
- 2 Franz Kafka: Vor dem Gesetz in „Ein Landarzt Kleine Erzählungen“ 1919 München und Leipzig
- 3 Franz Kafka: Der Prozeß 1983 Frankfurt am Main S.182-183
- 4 注2を参照のこと
- 5 注3のテキストによる。この場面は194ページの末尾にある
- 6 Franz Kafka: Von den Gleichnissen in „Beschreibung eines Kampfes“ 1983 Frankfurt am Main
- 7 Franz Kafka: Er, 1966 Frankfurt am Main S.48 以降このマルティン・ヴァルザーの編集によるカフカの散文集のテキストからの引用は、たとえばEr S.48という風

にアルファベットの略号とページを表す数字によってその個所を示すことにする。

- 8 Er S.208
- 9 Er S.197
- 10 Er S.197
- 11 Er S.195
- 12 Er S.196-197
- 13 Er S.195
- 14 Franz Kafka: Hochzeitsvorbereitungen auf dem Lande und andere Prosa aus dem Nachlaß, 1983 Frankfurt am Main S.86
- 15 Er S.198
- 16 Franz Kafka: Hochzeitsvorbereitungen auf dem Lande und andere Prosa aus dem Nachlaß, 1983 Frankfurt am Main S.77
- 17 Er S.200
- 18 Franz Kafka: Hochzeitsvorbereitungen auf dem Lande und andere Prosa aus dem Nachlaß, 1983 Frankfurt am Main S.62
- 19 Er S.206
- 20 Er S.205
- 21 Er S.197
- 22 Franz Kafka: Nachgelassene Schriften und Fragmente II, 2002 Frankfurt am Main S.374-375
- 23 Er S.197
- 24 Heinrich von Kleist: Über das Marionettentheater

